

特集「イノベーションプロセスのスタディ」の 編集にあたって

諏訪正樹^{†1}

イノベーションのサイクルを起こすためのうまい方法論はあるか？ それが起こるための社会的条件（土壌）を記述できるか？ この特集号に明快な解答を得んとするのは拙速に過ぎるかもしれない。招待論文を執筆された平田，中島両氏がその問題を議論している。

- イノベーションを起こさんとする者は「何が待ち受けているか分からない」状態で世に種を蒔く。
- 「簡単に理解や賛同を得られるとは限らない」。
- 世の評価には時間がかかる。種が高い評価を得て世を変えるとき，何か「特別のきっかけがあったわけではない」。

演劇の世界での事例を基に考察する平田氏の言葉は的を射抜いている。

新しい「ものごと」は個人の意識・生活や社会情勢とゆっくりインタラクションを起こすこと，それは時に新たな価値観や視点を生むこと（中島氏が説く「現在ノエマ」），新たな価値観や視点を基に将来の「ものごと」の種を発想すること（中島氏が説く「未来ノエマ」）のサイクルがイノベーションプロセスの本質であろう。社会はそうやって進化してきた。

イノベーションがそのような社会現象であるとの認識から，本特集号は，

- 必ずしも計算機システム内での情報処理だけでなく，人間の認知プロセスにおける所作や社会的インタラクションも含めて情報処理ととらえること
- インタラクションの事例や方法論の研究はケーススタディ的にならざるを得ず，したがって，必ずしも数値的な裏付けや客観的指標だけでなく，内部観測的もしくは主観的な観察分析をも重要視すること

の2点をスローガンとして掲げた。査読においても，論文の新規性・有用性を上記の観点

から慎重に吟味判定した。30件の論文が投稿され，13件を採択した（採択率43%）。“イノベーションかどうかの評価には時間がかかる”ため，特集号編集委員会では，客観的な指標だけで評価判定することをあえて拒み，“将来有望なノエマを生みそう”という説得力を有する（と感じた）論文を選んだ。その議論はかなり白熱した。編集委員の皆様，どうもお疲れさまでした。

採択論文は3つに大別できる。社会ネットワーク・インタラクションに関する研究が5件，技術開発におけるインタラクション事例および記述に関する研究が3件，認知・コミュニケーションプロセスおよび支援ツールに関する研究が5件である。

本特集号が世に何かを与えられるか？ 再度平田氏の言葉を借りると「渦中にある私（達）には分からない」。情報処理研究のイノベーションの種になることを編集委員一同祈念してはいるが…… 審判は読者や社会とのインタラクションを「待つ」ことにします。

「イノベーションプロセスのスタディ」特集号編集委員会

- 編集長
諏訪正樹（中京大学）
- 幹事
田村 大（（株）博報堂），松村真宏（大阪大学）
- 編集委員（五十音順）
和泉 潔（産業技術総合研究所），伊藤京子（大阪大学），折原良平（（株）東芝），
庄司裕子（中央大学），高間康史（首都大学東京），花村周寛（大阪大学），
藤井晴行（東京工業大学），三石祥子（科学技術振興機構）

^{†1} 中京大学
Chukyo University